

1章 「科学する心を育てる」とは

当財団は、幼児期の子どもたちが「すごい！ふしぎ！」「なぜ？どうして？」と感動したり、想像したりすることや、命の大切さに気づいたり、遊ぶ喜び、共に生きる喜びを感じる事が大切だと考え、「科学する心を育てる」という主題を掲げました。

ここでは、それぞれの園がどのように「科学する心を育てる」を考え、園の考えや理念と結びつけたのか、また、その考えを日々の保育の中でどのように実践していくのかについて、様々な視点や捉え方を紹介します。

1. 「科学する心」を育むしくみ 住吉幼稚園（愛知県刈谷市）

前年度の研究により、「幼児期の科学の芽」を育むことは特別なことをするのではなく、日常生活の中で生まれていくことや自然とのかかわりだけでなく、いろいろな人や身近にあるものとのかかわりすべてが幼児にとって「科学する心」につながるということが分かった。そして、子どもの育つ姿が明らかになるよう研究内容を絞っていく必要性を感じた。そこで、本年度は研究テーマを「見て、触って、やってみて、不思議を体験」とし、子どもの育ちにつながる「科学する心」を育むしくみを更に追究していきたいと考えた。

1. 研究の目標

「科学する心」を『好奇心や探究心をもち自分なりに考えながら活動している意欲・態度』と捉え、それを育んでいくためにはどのような環境に出会わせ、どのような体験をさせればよいか探り、「科学する心」を育むしくみを追究する。

2. 目指す子ども像

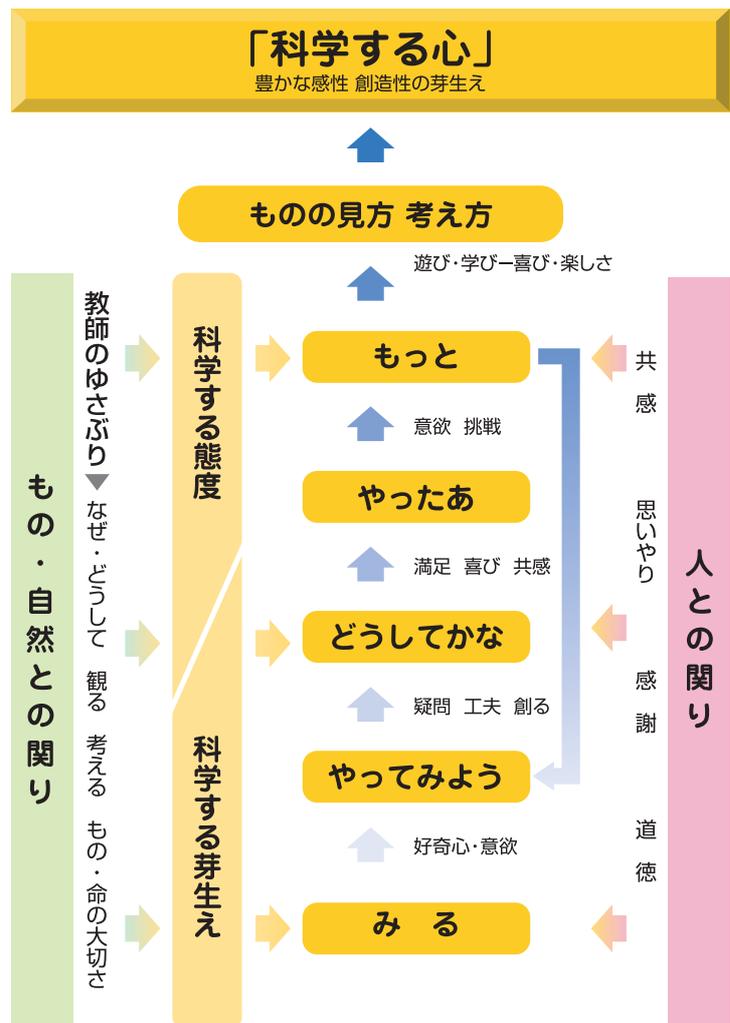
- ・自然物や自然事象に関心をもち、感動したり発見したりして心を弾ませる子
- ・身近な環境に自分からかかわり、試したり工夫したりする子
- ・いろいろな人とかかわり、共感したり相手のことを考えたりしながら行動する子

3. 「科学する心」を育むしくみ

目指す子ども像に迫るためには、子どもたちが身の回りのいろいろな出来事や身近な動植物との触れ合い・様々な人とのかかわりの中で、「すごいなあ」「どうしてだろう」という驚きや感動や不思議な場面を体験できるようにすることが大切である。

そしてその時、教師が子どもの科学する芽にゆさぶりをかけることによって好奇心を持ち、いろいろ発見したり自分なりに工夫したり考えたりする態度が身につく、分かった時の喜び楽しさを味わわせることによって「科学する心」が育っていくのではないかと考える。

そこで、子どもをとりまく環境の中で、好奇心や意欲、態度に刺激を与えることによって、「科学する心」が育つ「しくみ」を右記の図のように想定し、実践の積み重ねを進める。



シャボン玉の事例

5歳児のシャボン玉の事例の中の、幼児の姿、保育者や環境、人とのかかわりなどの抜粋を、ご紹介します

保育者 3歳児のシャボン玉遊びがしたいという思いを伝える。



保育者 子ども同士の技術では難しいことを把握し、展開を見守る。

シャボン玉・シャボン液・様々な用具

事例5 3歳児のためにシャボン液を作り、シャボン玉遊びを教えてあげて話を話し合う。考えを出し合ってプレゼントするシャボン玉液を作る。

事例4 うちわでのシャボン玉は、今までのでき方と違うことやシャボン玉の世界のようになっていく状況に心を動かす。うちわでのシャボン玉の国作りを楽しむ。

いろいろなシャボン玉作りを存分に楽しむ。

事例3 子ども同士で、大きなシャボン玉に挑戦する。うまく膜が貼らず、何度も挑戦するが、思うようにできない。

事例2 誕生会で行った大きなシャボン玉を、保育者とペアで作る。

事例1 誕生会で、誕生児の親子が協力して、とても大きなシャボン玉を作る。シャボン玉のでき方や動きをよく観て、気付いたことを言ったり応援したりする。

「科学する心」

豊かな感性 創造性の芽生え



ものの見方 考え方

遊び・学び—喜び・楽しさ



もっと

意欲 挑戦



やったあ

満足 喜び 共感



どうしてかな

疑問 工夫 創る



やってみよう

好奇心・意欲



みる

考えを出し合い、協力して作る友達がいる。幼稚園での出来事を一緒に考えてくれる家庭からの情報がある。

3歳児の子どもたちも、シャボン玉をやりたい。しかし、うまくできない子どももいる。

遊びを転換し、材料置き場からうちわを取り出し、シャボン玉を作ることを思いつき、試す友達がいる。

一緒にシャボン玉作りに挑戦する友達がいる。

一緒にシャボン玉作りに挑戦する保育者がいる。

誕生児と保護者が、2人で特大シャボン玉を作る競技をする。

ポイント

「科学する心」を『好奇心や探究心をもち自分なりに考えながら活動している意欲・態度』と捉え、「見る、やってみる、どうしてかな、やったあ、もっと」の5つの「子どもの育つ姿」を示して、「科学する心」を育むしくみを追究しています。そのしくみをわかりやすい図で表し、園全体で共通理解が図れるように工夫がされています。子どもたちの経験や活動は、常にこのしくみのように流れるわけではなく、事例3のように追究や挑戦が停滞してしまう場面がありますが、このように共通理解をする基があることで、状況や必要な援助を判断し、実態を把握して見守ることができ、「科学する心」が育ったことを捉えることにつながりました。